

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520093

研究課題名(和文) ベルト・モリゾにおけるジャポニスム研究

研究課題名(英文) Japonisme in the Art of Berthe Morisot

研究代表者

坂上 桂子 (SAKAGAMI KEIKO)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：90386566

研究成果の概要(和文)：

ベルト・モリゾにおける日本美術からの影響については、これまで断片的な研究にとどまり、詳しくは研究されてこなかった。本研究はモリゾの子孫であるルアール家が所蔵する歌麿をはじめとする日本美術の作品について調査を踏まえたうえで、日本のモチーフの導入から主題の展開、構図の形成にいたるまで、継続的に日本美術がベルト・モリゾの芸術形成に与えた意味を総合的に検討したものである。

研究成果の概要(英文)：

The influence of Japanese art on Berthe Morisot has yet to be fully researched. In this study, I examine certain Japanese images sources owned by the Rouart family, descendants of Berthe Morisot, and investigate how she introduced Japanese elements into the development of her subjects, the form of her compositions, as well as her motifs. Through this, I attempt to determine the overall influence of Japanese Art on her artistic evolution.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：美術史

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：美術史、美学、日本趣味、近代、女性

1. 研究開始当初の背景

ベルト・モリゾについて、作品と生涯との関連性を中心に、ジェンダーの視点から研究をしていた。本研究の総合的な成果は、拙著『ベルト・モリゾーある女性画家の生きた近

代』(小学館2006年)においてまとめられている。

同時期、モリゾの子孫であるルアール家において調査をしていたところ、同家に所蔵される日本美術品(浮世絵版画および小冊子本)を発見した。これらは今まで知られていない

資料であり、ルアール家からの依頼を受け、これを手がかりとし、モリゾにおける日本趣味の問題の再検討を着手するに至った。

2. 研究の目的

モリゾと日本美術との関係については、すでに個別の作品研究などにおいて、これまでにある程度指摘されてきている。しかしながら、総合的な見地から、日本美術の受容、およびそこからモリゾ芸術の全体像を考察することは、これまで十分に行われてきたとはいえない。そこで本研究においては、ルアール家所蔵の新資料を手がかりに、それらの調査を基礎とし、そこから展開させて、モリゾの芸術と日本美術とのかかわりを、より本格的に検討することを目的とした。

具体的には以下のような目的を設定した。

(1) ベルト・モリゾの作品においていかに日本趣味が反映しているか、モリゾの具体的な作品1点1点のなかに詳細にさぐっていく。まずは日本のモチーフと主題について、次には日本の手法（色彩、構図、主題、媒体、その他表現）について、細部にわたり研究することで、ベルト・モリゾの芸術を、ジャポニズムの視点からとらえなおすことが第一の目的である。

(2) 周辺の交流関係からさぐることで、モリゾの日本趣味の問題を当時の文脈のなかにおいてみるのが第二の目的である。具体的には、マネ、ドガ、カサット、ステヴァンス、シャヴァンヌ、ファンタン＝ラトゥール、モネ、ルノワールなどモリゾが実際に親しく交流をした画家との関係を、日本趣味を視点として検討する。

(3) モリゾが、日本趣味を個人的に取り入れた問題に本研究を終わらせることなく、モリゾの日本趣味を通して、19世紀半ばから後半においてフランスでさかんになる日本への関心がいかなるものであったかを、より一般的な文脈のなかで考察することがここでの最終的な目的である。

そうすることで、19世紀なかばに始まり、現在にまでいたる日本とフランスの文化交流、すなわち相互文化の理解と受容の問題を根本的に考察する手がかりをつかみ、現代から将来にむけての展望を獲得することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) パリのルアール家において、日本美術関連の資料を調査する。先に発見された資料に加え、さらなる資料が現存するかどうかを調

査する。

(2) 調査ののち、それらの資料に基づいて、モリゾの作品との比較検討に入る。比較については、油彩画ほか、水彩画、版画についても行う。

(3) パリ国立図書館、オルセー美術館、マルモタン美術館を中心に、同時代のジャポニズム関連の資料を調査する。

(4) 同様に、同時代の挿絵雑誌、広告などにも広く関連の資料を調査する。

(5) マネ、ドガ、カサット等、日本趣味を共有した仲間の画家たちとの交流、および、彼らの作品を調査し、モリゾとの共通面、相違点について比較検討する。

4. 研究成果

(1) ルアール家所蔵の日本美術品の調査と作品との比較検討による成果

ルアール家に所蔵される浮世絵版画（歌麿）および小冊子（広重）を、モリゾの作品と具体的に比較検討することによって以下が導き出された。

① 歌麿の作品については、モリゾの女性肖像に、その親縁性を見出すことができる。ただし、画像をそのまま援用するという形での影響ではないので、日本美術との関連性は、ここでは慎重に判断する必要があることがわかった。

② モリゾ家所有の広重の作品集については、モリゾの風景画の多くにその親縁性を見出すことができる。しかしこれについても人物像同様に、参照した可能性が推測できるもの、画像をそのまま援用する形での影響ではないため、影響関係を指摘するには慎重である必要があることがわかった。

③ ルアール家にはなお、最初に見聞した資料のほかには、日本美術関連の資料は存在しないことが判明した。

また、ルアール家所蔵の資料に関する問題としては、これらの冊子や版画の来歴、および所蔵に至る経緯が不明なことである。このため、ルアール家所蔵作品から、モリゾの日本趣味を考察するには限界があることが判明し、別の角度からの検討が必要になるにいたった。

(2) 「化粧」の主題に関する研究

モリゾの具体的な作品から日本趣味を考察するにあたり、もっとも重要な手がかりとしてあがってきたのは、「化粧」や「身支度」の主題の作品である。そこでは、ほかの主題以上に、明確な日本趣味との関連性をうかがうことができるからである。そこで次に、この主題から考察を展開し、以下のような結果を得た。

① モリゾの「化粧」の図像の特徴の検討

モリゾは1870年代半ばから晩年にかけて「化粧」を主題に、継続的に一連の作品群を制作している。これらの細部には日本的要素がじつに多く見出される。どのような経緯で、なぜこの主題やモチーフが選択され、描かれ続けたのか。ジャポニズムの観点から、図像のヴァリエーションを追いつつ時代ごとにモリゾが展開した作品の特徴を明らかにしてみた。その結果、「化粧図」がモリゾにとって、つねに立ち返るべく図像として存在し、きわめて重要な主題として芸術活動の中心に位置していたことが明らかになった。

② マネとの比較検討

同主題の着想は、はじめマネから得たものと考えられる。とはいえ同じ主題を扱いながらもモリゾの視点はすでに最初の作品から女性の私生活としての要素が強く打ち出されており、マネの表現手法とは明らかに異なる。独自の図像を試行錯誤のうちに創案するなかで、どのような工夫がされていたのか。同じ日本趣味への関心を共有しつつも、両者はそれを異なるレベルで吸収し、展開したということができる。ジェンダーの視点から日本趣味をとらえると、異なる受容の問題が浮上することは、重要な視点である。マネからの影響下においてではなく、モリゾが別の手法によって日本趣を独自に受容し、展開しようとしたことが本考察から見出せた。

③ カサットとの比較検討

カサットとモリゾは、ともに日本の浮世絵展を訪れたことが知られている。それを機会に、モリゾとカサットが行った試みを、ここでは比較検討しながら考察を試みた。展覧会后、二人はほぼ同じ構図のうちに「化粧」の図像を研究しており、互いに意見交換をしながら「化粧」の図像のなかに、日本美術を吸収しつつ、各々独自の作品の展開をしようとしたことは明らかである。しかしながらともに女性画家でありながらも、その受容の手法は、よく検討すると根本的に異なるものでもある。このことは、両者の芸術の特徴の相違を浮き彫りにすることになり、興味深い結果を得たといえる。

④ その他の「化粧」の図像との比較検討

日本趣味の問題を浮き彫りにするため、同図像のほかの源泉の可能性についても検討を行った。

「化粧」の主題は、古代から存在するが、とりわけ18世紀ロココ美術に多く見出せる主題である。ロココ美術への関心は、ルノワールなど身近な画家を通じてモリゾが抱いたものであり、明らかにロココ美術を源泉とする要素がモリゾの作品にも少なからず見出せる。

また同時代には、スーラ、シニャック等、新印象派をはじめとするほかの画家の作品のほか、広告、ポスター、挿絵など多くの大衆的イメージの中にも「化粧」の主題を見出すことができる。しかもこれら「化粧」の主題の多くには、日本趣味的要素が少なからず反映している。そこで、こうした図像を幅広くとりあげ、モリゾの作品と比較検討を行った。

こうして同時代の「化粧」のイメージを検討するなかでわかったことは、「化粧」の図像のなかには日本趣味が、とりわけ大衆イメージのレベルにおいて、かなり色濃く反映しているということである。したがってモリゾをはじめ多くの画家たちが、この図像を日本趣味の要素とともに扱っているのは、画家の個性や、個人的に寄せられた特別な日本趣味への関心ということに必ずしも由来するのではなく、こうした19世紀当時フランス社会全般に流布していたイメージ・ソースによるところも大きいと考えられる。この問題は、通常、一人一人の画家の問題として看過されがちだが、19世紀美術の日本趣味について考察する際に興味深い重要なポイントであると考えられる。

以上の視点による考察の結果、モリゾの「化粧」の図像には、古代からの伝統的図像、同時代の絵画作品や大衆イメージを含めた図像から影響、自分自身の私的体験に加え、日本の浮世絵から学んだ構図や視点が巧みに融合されていることが明らかとなった。

(3) 総合的見地からみたモリゾの日本趣味

モリゾにおける日本趣味は、以上で検討した「化粧」の主題以外にも見出すことができ、総合的にモリゾの日本趣味をみると、結果として、今まで考えられていた以上に全般にわたって日本美術に多くを負っていることがわかった。具体的には以下のようにまとめられる。

① 画中における陶磁器や装飾品など日

本のモチーフの導入。マネ、ドガからの影響ではじまり、初期から晩年までみられるのが特徴。

② 扇面など日本美術を思われる支持体および水彩の採用、ならびに版画制作の試み。主題の問題に限らず、表現や手法への関心が見られる。

③ 風景画における独自の構図の形成。浮世絵から学んだ構図が色濃く反映している。

④ 室内を装飾するための装飾パネル画の構想。

日本の装飾画から、モチーフや構図を学んだと考えられる。

以上を総合的に考慮してはじめて、モリゾにおける日本趣味の問題が本格的に浮かび上がってくる。そして重要なことは、モリゾにおいてはここにまとめた種々の試みが、一時期な思いつきによるものではなく、各時代を通して継続的に試みられており、モリゾ芸術の形成の主軸にかかわっていることである。

(4) モリゾの日本における近年の受容の問題

なお最後に本研究と関連して、日本とフランスの美術に関する相互受容、ならびに交流の問題を、より現代的な視野のなかで考えるべく、近年の日本におけるモリゾ受容の問題についても考察を展開した。

近年日本において、モリゾはもっとも人気を得た画家の一人だが、なぜ、今モリゾが私たちにアピールするのかという問題である。

モリゾの日本での受容は、欧米における研究の展開と受容とも関連し、本格的な展覧会開催をもって、ここ数年の間に促進されたものと考えられる。しかし、日本でモリゾが人気となり、多く受け入れられるようになった背景には、そうした欧米での研究成果の問題だけではなく、女性がいかに生き、描いたかという、女性のライフスタイルへの関心がある。とくに、私生活と公的生活においても自己実現を果たしたモリゾの生き方は、日本の現代の女性たちに大きくアピールしていることが大きな要因の一つとなっているように考えられる。

19世紀という過去のフランス文化における日本美術の影響だけではなく、モリゾが画家として、現在の日本においていかに受け入れられているかを考察することは、モリゾの日本趣味の問題についても、新しい観点を示してくれるものである。

日本趣味の問題を、文化の相互交流の枠のなかで大きな視野のうちに捉えた場合、こうした視点を有することによって、それは現代の身近な社会的関心とも重なり、今後さらにより意味深い問題を提供してくれるものになると考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕

① 坂上桂子

「印象派ブームのなかのベルト・モリゾ」『美術フォーラム 21：特集 日本のなかのフランス—創造的受容』23巻 2011年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂上 桂子 (SAKAGAMI KEIKO)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：90386566